

達人も出た新格闘技
『巖流島』の行方は!?



U-FILE CAMP

田村潔司

これからの時代のキーワードは
一時期の“流行り”ではなく、
“深み”だと思います

聞き手／編集部（大武道君弐号）

『Dynamite!! ～勇気の子カラ2008～』での桜庭和志戦に勝利した後、沈黙を続けていた田村潔司。その田村が6年半ぶりの復帰戦の舞台として選んだのが『巖流島』だった。よりによって、なぜ『巖流島』だったのか？ 第二次UWF→UWFインターナショナル→リングス→PRIDEと、格闘プロレスの時代から総合格闘技の時代をプロフェッショナルとして生き残ってきた男の考える“これから”とは？

結果として『巖流島』には

出てよかったなと、いまは思っていますね

——桜庭和志戦以来、約6年半ぶりの実戦復帰の舞台が『巖流島』だったわけですが、どんな思惑で出場されたんですか？

田村 思惑というか、とある人……まあ間に入って話をしていたマッチメーカーみたいな人がいるんですけど、その人がしつこかったからです。

——谷川貞治氏との直接交渉ではなかったんですか？

田村 はい。直接ではないです。

——しつこかったという点、どういう面ですか？

田村 うーん、基本的にしつこい人なので……。

——え、その人がしつこいから仕方なく出たんですか！

田村 あとは会場が両国国技館ということで大きな舞台を用意してもらったということもありますし、それと単純に競技として面白いなと思っていたので。

——以前から興味はあったということですね。具体的にいうとどんなところが面白いと感じてたんですか？

田村 闘技場が円形だったり、場外への押し出しがあったりと、ルールが定まっていなくて、ハチャメチャ感みたいな部分がある面白さ。

——そんなハチャメチャ感が満載な舞台に出ていく不安は

なかったですか？

田村 もちろんありましたよ。私生活ですごくバタバタしていたところにいただいたオフアードでしたし。だけど、そんな状況にもかかわらず土足で入りこんでくる人がいたので……。

——そのしつこいマッチメーカーみたいな人は田村さんに『巖流島』に出る意義をどう話してたんですか？

田村 いや、「とにかく出ろ！」と。

——それはヒドイ！

田村 でしょ？ あとはまあ、「出たほうが僕（田村）にとってもいいよ」ということだったり、武道的な部分だったりですかね。

——武道的？

田村 はい、武道的なところが何か面白そうだなと思いましたがね。日本から発信している格闘文化というか、そういうものになり得る、あるいはヒントになるんじゃないかと思いました。

——『巖流島』参戦というのは、田村さんのキャリアの中ではかなり毛色の違う試みとなりましたか？

田村 はい。これまでやってきたこととはまったく違いますよね。ただ僕自身、総合格闘技をやっている、何か他に違う形の競技があってもいいのになあと思っていたところだったので、タイミングが合ったと思います。あとは谷